

## 触る行為について

静岡県立大学 短期大学部  
准教授 藤田 雅也



### 1. 触覚の働き

人は生まれた瞬間から、目で見るとよりも先に、触ることによって自分の周りの空間を認識していきます。唇や舌に触れるものから始まり、手の届く範囲、動いて行ける範囲へと、徐々に会う世界が広がっていきます。触れるという行為を通して、その対象が安全であるかを確認し、自分にとって必要なものであるかどうかを判断しながら、自らの生命を維持していると考えられます。また、自我の芽生えを確認するなど、心身の発達においても触覚の機能は不可欠なものです。特に生活経験が少ない乳幼児にとっては、見たり聞いたりすることよりも、触ったり舐めたりすることの方が、対象についての情報をより早く得ることができるでしょう。

人の感覚には、一般的に視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚があり、五感と総称されます。中でも視覚や聴覚は五感の中で上位の感覚として扱われ、触覚は下位の感覚として扱われることがあるようです。しかし、人が生きていく上で、触る行為は原初的な営みであり、表現活動や鑑賞活動においても触覚による実体験の積み重ねが大切であると考えられます。

彫刻家の高村光太郎は、「触覚はいちばん幼稚な感覚だと言われているが、しかもそれだからいちばん根源的なものであると言える」と述べた上で、「私の薬指の腹は、磨いた鏡面の凹凸を触知する」<sup>1)</sup>と主張しています。対象の表面のわずかな凹凸を把握するためには、目で見ただけではなく、指先で直接触れることによって、より正確な情報が得られるというわけです。筆者も石を素材とした彫刻を制作していますので、研磨した石の表面のわずかな起伏を触知する指先の機能について、自らの経験を通して実感しています。

### 2. 触覚による関わり方の変化

昔と現代では、人の触覚の使い方が少しずつ変化してきています。ボタン一つで生活の様々な営みができてしまうコンピュータ技術の進化も影響しているでしょう。例えば、温度や重さ

などを知るためには、昔であれば直接触れたり持ち上げたりして自らの身体を通して感受した情報と、これまでの経験や記憶を結び付けながら確認していました。しかし現代では、それらを電子機器が計測し、調整したり制御したりできるようになりました。

技術の進歩によって、私たちの生活は便利で快適になってきたと言えるでしょう。しかし、その一方で、直接的な体験が減り、体験したような気持ちになってしまう間接的な関わり方が増えてきているのも事実ではないでしょうか。

また、安全で衛生的な生活を求めている現代社会において、大人は子供たちにさまざまな規制を与えているかもしれません。「危ないから」「汚れるから」などの理由から、子供たちが様々なものに触れる機会を制限してしまっていることも少なくはないでしょう。

バーチャルな世界が拡散している現代においてこそ、自らの身体を通して、目の前にあるものに触る行為は、対象の存在を理解し、自分なりの価値や美を見出していく上で重要な役割を持つと考えます。

### 3. 触ることによって感じ方が変わる

人は目の前の自然物や作品などを鑑賞する際に、目で見て形や色、大きさなどを判断することが多いです。この見るということは、目に映った映像、いわば網膜に触れた像が、神経を通して脳に届き、その視覚的な情報を感じ取ることです。そのように考えると、音を感じる「聴覚」や、匂いを感じる「嗅覚」、味を感じる「味覚」、手触りを感じる「触覚」によって対象と関わる行為も、鑑賞活動として捉えることができます。

彫刻は触覚の芸術であると言われるように、視覚だけでなく、触れて感じることによって、その素材や造形としての特徴などをさらに深く知ることができます。特に質感や重さ、温度は、触らなければ感受することはできません。しかし、美術館などで作品に直接触れる機会は多くありません。

そこで筆者は、児童が本物の作品と出会う特別授業などにおいて、小学校の空き教室に作品を展示し、作品に触れながら鑑賞する実践を行ってきました。作品に触ってもよいことを伝えると、子供たちは、指先や掌で表面を撫でて、石という素材の触り心地を確かめていました（写真 1）。比較的軽量な作品は、実際に持ち上げて重さを感じるなど、美術館では体験することができない活動も取り入れました（写真 2）。触ることによって作品との心理的な距離も近くなり、匂いや



写真1 触って鑑賞する子供たち



写真2 重さや温度を感じる子供

温度にも興味を抱くなど、五感を通して作品を鑑賞する子供の姿が見られました。

「ざらざらしている」「磨いたところはつるつるしていて、きもちいい」「恐竜のたまごみたい」「こんなに小さいのに重い」「最初は冷たいと思ったけど、触っていると温かくなってきた」など、子供たちは作品に触れることで、質感や温度、重さを感じ取っていました。中には、作品を自分の頬にあてて、なめらかな触感を楽しんだり、「土みたいな匂いがする」と自分が知っているこれまでの生活経験と結びつけたり、比較したりしながら、香りを受感する姿も見られました（写真3）。



写真3 頬にあてて触感を楽しむ子供

#### 4. どのマルを触る？

筆者はこれまでに、触覚を中心とした諸感覚の働きを意識した幼児教育や美術教育の推進によって、子供の表現行為が豊かに広がっていくことを実感してきました。特に触覚の働きが敏感であるとされている乳幼児期に、多様な素材に触れる経験を積み重ねていくことには、教育的な価値があると考えています。そこで筆者は、乳幼児の素材への関わり方についての実態を把握するために、約300名の乳幼児を対象とした調査を実施しました。調査では、重さや質感が異なる7種類の素材に乳幼児が出会う場を設定し、素材に関わる際の乳幼児の行為と発話を分析しました<sup>2)</sup>。

写真4は、ステンレスの球体に触る5歳女児の姿です。ステンレスを持ち上げ、次に上下に振った後で、女児は「これ重い」と発話しました。視覚によって対象を見たときに自分が想像していたよりも「重い」と実感したようです。この女児はその後、すべての素材を順に持ち上げて重さを比べ、重い素材と軽い素材に分類していきました。重さの順番を推測して7つの素材を並び替えていく乳幼児の姿も多く見られ、わずかな重さの違いを敏感に感じ取っていることが分かりました。また、硬さを確認する際には、指で押ししたり、力を加えたりする行為を伴う傾向があることも分かりました。重さや硬さを確認する際には、特有の行為が見られることが乳幼児の実態を通して明らかになってきました。



写真4 持ち上げて重さを感じる

さらに、各素材への接触時間の分析から、乳幼児は光沢感のある素材を積極的に触る傾向があることが分かりました。光沢感に興味を示す際の発話には「ピカピカしている」「何か映っている」などがあり、素材をじっと見つめたり、覗き込んだりする子供の姿が見られました。これらの実際の姿から、子供たちは自分自身のこれまでの経験と結び付けながら、触ることによ

って、それぞれに違った記憶が導き出され、結果としてイメージするものも変わるのではないかと考えています。乳幼児が素材に触れる経験がその後の表現行為に与える影響について、今後さらに追究していきたいと考えています。

## 5. 芸術教育における触覚の重要性

子供たちには、諸感覚を通して世界と直接的に関わる経験を多く味わってもらいたいと考えています。なぜなら、自分の身体を通して感じた実体験は、その後の表現行為の可能性を広げていくと思うからです。このことは、芸術教育を展開していく上で、とても大切な視点ではないでしょうか。例えば、幼児や児童を対象に自然素材を使った造形活動を行う際に、その自然素材との「出会い方」によって、その後続く子供たちの表現行為は変化すると考えます。あらかじめ用意された自然素材を使うのか、素材を探す行為から活動を展開していくのかによっても、子供たちの抱くイメージは異なるはずです。

素材と深く関わることによって得られる感覚には、視覚による色や形との出会い、聴覚による音との出会い、嗅覚による匂いとの出会い、触覚による手触りや重さ、硬さなどとの出会いなど、多様な感覚による固有の機能と関わっています。自らの身体を通して素材と関わる経験や学びとして、造形的な遊びの意義や価値を問い直すことも大切です。

どれだけ社会や時代が変化しても人間の諸感覚を通して対象と関わる行為や経験は、人が生きていく上で根源的な営みです。この根源的な営みを豊かに育んでいくためにも、芸術教育の役割は大きいと言えるでしょう。

---

<sup>1)</sup> 高村光太郎、『美について』、筑摩書房、1967年、p.7

<sup>2)</sup> 拙稿、「乳幼児を対象とした素材への触察行為に関する一考察」、大学美術教育学会『美術教育学研究』、第52号、pp.321-328、2020年。調査期間は、2019年6月から7月。本調査で使用した素材は、直径約55mmのステンレス、大理石、テラコッタ（土）、アクリル樹脂、木（ブナ材）、コルク、発泡スチロール。